

## 第一〇八收容所

北海道 遠藤 勝好

大正三年九月、札幌市で出生。伊藤組に勤めていた父と共に市内の小学校に通い、その後父の転勤で帯広市に移住。柏小学校高等科を卒業し、昭和四年に札幌市の大丸藤井に入社した。

昭和九年、旭川市の輜重第七連隊自動車中隊に現役入隊。その後朝鮮の新義州、満州の鉄嶺などの派遣部隊に勤務中、満州事変に参加。その後、中国の広東付近の兵站輸送勤務中、疾病で広東野戦病院に入院した。退院後、輜重第四連隊補充隊を経て帰還、除隊した。

昭和十七年八月、搜索第七連隊に召集されたが、一カ月未滿で解除された。

同二十年初めに第八十九師団司令部に召集され、四月末、釧路から樺太択捉島の天寧に派遣された。終戦で現地で召集解除されたが、ソ連軍に侵攻され、日本

軍・民二、三百名が拿捕され、船でハバロフスク州のソフワガニに連行され、その中に私も含まれていた。これは九月二十三日のことで、汽車で二時間足らずの第一〇八收容所に抑留されたが、地名は思い出せない。

六十人足らずの小さな丸太小屋で、もう一棟あった。私のいた小屋では本道出身者は二十人で、他の四十人は大阪出身者だった。道路造りや森林伐採作業に出されたが、二十年の冬は特に寒気厳しく、零下六〇度まで低下し、週に六、七人は死亡した。

高梁主体の食事で、パンは一日二百グラムくらいで、ノルマ達成時には三百グラムとなったが、空腹に耐えられず、蛇・鼠はもちろんのこと、馬糧の燕麦を盗み、スコップの上で煎って食べたこともあるが、空腹は満たされなかった。入浴はドラム缶で週一回で、衣服は入浴のままで、厳寒期には綿入れの満服を着せられた。

常時四、五人のソ連兵に監視されていたが、所内では日本人の自主管理であった。

私は伐採作業中、丸太で足を傷め手術を受け治ったが、その後、近傍の小学校で雑用や除雪の軽作業に就

かせられたので体力は維持できた。

昭和二十二年に入って高齢者、病弱者の帰国が優先され、同年十月、ナホトカから第三回目の船に乗せられ、同月十二日に舞鶴港に上陸、帰還することができた。

しかし、船中では、再びいづれかのソ連領に連行されるのではないかとの不安は消えず、船内の同胞は平穩を装っていたものの、心中は激しく動揺していた。

大丸藤井の会社では私が初めての召集者であったので、召集後、帰還まで私の留守宅に俸給が送られていた。

現在八十二歳となり悠悠自適の生活を送っており、軍隊時代の写真で往時を偲ぶこともあるが、ソ連での抑留生活は忌まわしい一時であった。

## 抑留記

東京都 金子亮輔

住 所 立川市曙町三丁目一一一九  
生年月日 大正十四年八月一日生

現役入営 北支派遣軍衣第四二九五部隊

独立歩兵第四十四大隊入営（昭和十九年十二月）

昭和二十年六月北支より移動、七月より北朝鮮興南市に駐屯す。宿舎は日本人高等女学校。毎日、対米戦闘の教育を受ける。演習場は定平郡竜口里のハゲ山と奥地で、また昭和二十年八月八日「ソ連が対日宣戦布告」の情報が入り、ソ連戦軍に備えたが、八月十五日に終戦となる。我々は十六日に知る。

九月二日ごろ、武装解除となる。興南港にソ連の貨物船が入港する。日本軍の糧秣や衣類等を、日本軍將校を除いて毎日かり出され、倉庫より船に使役として運んだ。

昭和二十年九月ごろ、日本へ帰国するのだと乗船命令を受け、ソ連兵がついていた。連行された所はウラジオストックで、港に上陸。市内を巡って対岸の丘の上にあるラーゲル（収容所）に。地区はわからない。九月二十日ごろだと思います。

シベリアは九月に入ると日本と異なって寒い。収容